

大学生の日常会話におけるうわさの類型化 —内容属性の評価の観点から—¹⁾

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 竹中 一平²⁾

筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系 松井 豊

Classifying rumors within the everyday conversations of university students: From the perspective of their content attributes

Ippei Takenaka and Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to classify rumor talk within the everyday conversations of university student from the perspective of the content attributes of humor, certainty and anxiety. Specifically, the study investigates the replication of the 'humor' and 'anxiety' types of rumor identified in Takenaka (2003) and the 'humor', 'anxiety' and 'daily' types discussed in Takenaka (2004). Rumors gathered from four universities of different group characteristics are evaluated in terms of the three content attributes. The results indicate that the 'humor' type of rumors has high humor and low certainty, that the 'anxiety' type has low humor and high anxiety, and that the 'daily' type have high humor and high certainty. The three types of rumor identified in this study replicate the findings of earlier studies (Takenaka, 2003, 2004).

Key words: rumor, type, conversation, everyday life

問 題

本研究では、大学生の日常会話で話されるうわさを対象とし、「面白さ」「確実性」「不安喚起」の3内容属性の評価の観点から類型化することを目的とする。

うわさの定義

Allport & Postman (1947) は、うわさを、「正確さを証明することができる具体的なデータがないままに、口から耳へと伝えられて、つぎつぎに人々の間に言いふらされ、信じられてゆく、できごとに関する命題」と定義した。また、木下 (1977) は、うわさを、「社会的に広がりをもった人間関係のネットワークの中を次々と流れていく、確実な知識を土台にもたないあいまいな情報」と定義した。

これらの定義をまとめると、うわさは、伝播現象としての側面と、情報内容としての側面との2側面から成る現象であると捉えられる。すなわち、うわさは、第1に、「口から耳へと伝えられる」や「人間関係のネットワークの中を流れる」のように、パーソナル・コミュニケーションによって伝播する情報であると考えられる。第2に、「正確さを証明

-
- 1) 本論文は、第一著者が研究の立案・分析・執筆を行い、第二著者が研究計画に関わった。本論文の内容は、2006年度筑波大学大学院人間総合科学研究科博士論文に含まれている。また、本論文は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費 18・3891）の助成を受けた。
 - 2) 日本学術振興会特別研究員。

する具体的なデータがない」や「確実な知識を土台にもたないあいまいな情報」である一方で、「信じられていく」ように、うわさとは、不確実でありまいである反面、人々に信じられている情報であると考えられる。

本研究では、うわさが持つ「伝播現象」と「情報内容」との2側面のうち、「情報内容」の側面に重点を置き、うわさを「会話でやり取りされる、確実な知識を土台にもたない情報」と定義する。また、うわさは、その内容について、共通の興味や関心を抱く集団の中で流布することが考察されている(木下, 1977)。そこで本研究では、受講する講義や大学環境、生活範囲などを共有している可能性が高いと考えられる大学生を対象とし、日常会話でやり取りされるうわさに限定して検討する。

うわさの種類

従来うわさ研究においては、うわさを分類するためにいくつかの種類が提案されている。竹中(2005b)は、従来うわさ研究における分類を、内容面からの類型(Knapp, 1944; 坂田, 1976など)、機能面からの類型(木下, 1977)、伝播面からの類型(廣井, 1988)、そして複数の分類基準を採用した類型(川上, 1997; 水野, 1998など)の4種に整理した。これらの先行研究のように、類型という視点を用いて多様な情報内容や機能を持つうわさを整理することは、流れるうわさの把握を容易にすると考えられる。

しかし、従来の研究において構築された類型は、これまでに出現した著名な内容のうわさを理念的に分類した類型にとどまっておき、実証的な検討は行われていない。また、川上(1997)や水野(1998)の類型は、内容面、伝播面、機能面の3種類の分類基準を用いているものの、各下位類型によって、分類に使用されている基準が異なっている。そのため、実際に流れるうわさを、これらの類型を用いて操作的に定義することは難しいと考えられる。

野村・木下(2006a, b)は、実際に流れたうわさを収集し、その内容面と機能面とを組み合わせた分類を提案した。内容面としては、「災害」「食物」「学校」の3種類の具体的なうわさの内容を用い、機能面としては、木下(1977)における道具的機能と自己充足的機能との2種類を用い、両者の組み合わせによって、計6種類にうわさを分類している(野村・木下, 2006a, b)。しかし、大学新生が会話するうわさが「自殺」「事件」など13カテゴリーに分類されることを示した知見(竹中, 2005a)もみられることから、「災害」「食物」「学校」の3種

類の内容のみでは、本研究で対象とする大学生の日常会話におけるうわさを網羅しているとは言いがたい。

また、実際に流れるうわさから実証的に構築された類型としては、竹中(2003)および竹中(2004)が挙げられる。竹中(2003)は、茨城県内の国立大学学生を対象とし、大学生が日常会話において話題にする3種類のうわさと3種類の日常的な話題について、内容属性の評価と機能の評価との観点から検討した。その結果、うわさは、ある程度の確実性や情報提供機能をもち、不安喚起が高い「不安喚起型」のうわさと、確実性が低い一方で面白さや娯楽機能が高い「面白さ型」のうわさとの2類型に分類されることを明らかにした。また、竹中(2004)は、竹中(2003)の知見が、6種類の限定された話題しか扱っていない点、および1大学における結果であることから一般性に疑問が残る点を指摘した。そして、これらの問題点に対応するために、3大学において、うわさやうわさ以外の日常的な話題を含め、日常会話で話される様々な話題を網羅的に収集する方法を用いて、うわさと日常的な話題とを収集し、内容属性の観点から話題の構造を検討した。その結果、竹中(2003)と同様に、中程度の確実性をもち、不安喚起が高く、「自殺」「事件事故」などのうわさが含まれる「不安喚起型」の類型と、確実性が低く、面白さが高く、「怪談幽霊」「大学自体」などのうわさが含まれる「面白さ型」の類型とが抽出された。さらに、竹中(2003)では見られなかった、中程度の確実性と面白さを持ち、「日常生活」「教員学生」「ゴシップ」などのうわさが含まれる「日常話題型」の類型が新たに抽出されたことから、大学生が日常会話で話題にするうわさは、「不安喚起型」「面白さ型」「日常話題型」の3類型に分類されることを明らかにした。しかし、竹中(2004)では、3大学において話題を収集しているものの、その多くが竹中(2003)と同じ1大学によるものであり、結果の一般性には依然として疑問が残る。

うわさや日常的な話題に関する実証研究

従来うわさ研究においては、うわさの伝達に対して様々な要因が影響することが実証されてきた。竹中・松井(2005)は、従来うわさ研究において、うわさの伝達に関連することが実証されている要因と、うわさの伝達に関連すると理論的に考察されている要因とについて、内容属性と機能との2種の観点から整理した。因子分析によって、7種の内容属性と4種の機能の構造を検討したところ、内容属性と機能は、内容が面白く、相手を楽しませるよ

うな機能を持ち、娯楽性の側面に関係すると考えられる“娯楽性”因子と、内容がある程度確実であり、相手に情報提供できるような機能を持ち、情報性の側面に関係すると考えられる“情報性”因子と、内容の不安喚起の側面に関係する“不安喚起”因子との3因子に整理されることが明らかにされた。

一方、日常会話において話されるうわさ以外の日常的な話題を扱った研究においても、うわさに関する実証研究において扱われている内容属性や機能と、同種の要因が検討されている。稲越(1990, 1992)は、日常会話で話される話題を対象として、話の内容がどの程度面白かったかに関する“面白さ”、どの程度大切に關する“重要性”、そしてどの程度話題にしづらいかに関する“困難さ”などの要因と、会話相手との関係を検討した。多川・小川・斎藤(2006)は、大学生および短期大学生の日常会話における話題を収集し、その話題の“重要性”について検討した。松井(1997)は、マス・メディアとパーソナル・メディアの効用に関して分析をし、マス・メディアから受け取る情報は“娯楽的効用”と“情報的効用”との2種の機能をもつことを明らかにした。

このように、うわさ以外の日常的な話題に関する研究においても、“面白さ”や“重要性”といったうわさ研究で扱われているものと同種の要因について検討されている。また、メディア・コミュニケーション研究においては、“娯楽性”や“情報性”などの機能について検討が行われており、竹中・松井(2005)で抽出した“娯楽性”因子と“情報性”因子とも共通性をもつと考えられる。本研究では、うわさや日常的な話題に関する実証研究で見出されている“娯楽性”と“情報性”の2要因と、主にうわさ研究において扱われている“不安喚起”との計3要因を用いて、うわさを類型化することを試みる。

本研究の目的

本研究の第一の目的は、立地条件や学生数などの大学特性が異なる4大学でうわさを収集し、竹中(2003)で抽出された「不安喚起型」と「面白さ型」との2類型や、竹中(2004)で抽出された「日常話題型」の類型が再現されるか否かを検証することである。異なる大学特性をもつ大学において、一貫した類型が抽出されれば、大学生の日常会話におけるうわさを分類する枠組みとして、本研究で構築する類型が一定の一般性を持ち得ると期待される。具体的にうわさを収集する大学は、郊外の学園都市に立地し、学生数は約10,000人と非常に多い国立A大学

と、県庁所在地に立地し、約2,000人と比較的小規模の学生数の私立B大学と、地方の小都市に立地する医療福祉系大学で、学生数約4,000人の私立C大学と、都市部に立地し、学生数約2,000人と比較的小規模の私立女子D大学とにおいてうわさを収集する。

本研究の第二の目的は、「面白さ」「確実性」「不安喚起」の3つの内容属性を用いて、うわさを類型化することである。すでに竹中(2004)において、「娯楽性」「情報性」「不安喚起」の3因子(竹中・松井, 2005)に対応した「面白さ」「確実性」「不安喚起」の3つの内容属性を用いて、うわさが類型化されている。本研究では、竹中(2004)でうわさを収集した大学とは異なる大学においてうわさを収集し、これらの3つの内容属性による類型化の一般性について検証する。なお、本研究では、竹中(2004)との一貫性を確保するために、うわさと日常的な話題とを同時に扱うアプローチを用いる。

予備調査

目的

予備調査の第一の目的は、本調査実施にあたり、A大学、B大学、C大学、D大学の4大学において、実際にうわさが話されているのかを確認することである。また、第二の目的は、本調査で使用するうわさの項目を収集することである。

方法

調査対象 A大学学生7名(男性2名、女性5名)。B大学学生208名(男性40名、女性168名)。C大学学生9名(女性9名)。D大学学生30名(女性30名)。

調査時期 A大学：2004年12月。B・C・D大学：2004年6月。

調査方法 A大学およびC大学においては、集団面接方式の半構造化面接を行った。実施時間は、20から30分であった。B大学およびD大学では、個別記入形式の質問紙調査を行った。講義時間の一部を用いた集団調査形式で実施された。

調査内容 面接調査では、大学入学以降に聞いたうわさについて、具体的な内容を尋ねた。質問紙調査では、大学入学以降に聞いたうわさについて、自由記述形式によって回答を求めた。

結果

面接および自由記述の結果は第一著者が整理した。

A大学では7人の回答者から34件のうわさが得られた。得られたうわさは、第一著者によって「怪談幽霊のうわさ」「教職員のうわさ」「大学自体もしくは大学周辺の場所のうわさ」「自殺のうわさ」の4側面に分類された。B大学では208人の回答者から327件のうわさが得られた。得られたうわさは、第一著者によって「身近な友人・知人のうわさ」「有名人のうわさ」「教職員のうわさ」「大学生活のうわさ」の4側面に分類された。C大学では9人の回答者から38件のうわさが得られた。得られたうわさは、第一著者によって「教職員のうわさ」「大学生活のうわさ」「事件や事故、危険な場所のうわさ」「有名人のうわさ」の4側面に分類された。D大学では30人の回答者から135件のうわさが得られた。得られたうわさは、第一著者によって「身近な友人・知人のうわさ」「有名人のうわさ」「教職員のうわさ」「大学生活のうわさ」の4側面に分類された。各大学で収集されたうわさの回答件数およびそれぞれの具体的な内容を、Table 1に示す。

調査方法によって収集されたうわさの件数は異なるものの、平均すると一人につき3.79件のうわさが収集されたことから、調査対象となった4大学において学生がうわさを会話することは、一般的な事柄であると考えられる。

本調査

目的

予備調査の結果に基づき、A大学、B大学、C大学、D大学の4大学で調査を行うことによって、異なる大学特性をもつ大学でうわさを収集し、「面白さ」「確実性」「不安喚起」の3つの内容属性を用いて、うわさを類型化することを目的とする。

方法

調査対象 大学生589名(男性138名,女性447名,不明4名)。各大学別の内訳は、A大学が115名(男性64名,女性51名)、B大学が191名(男性32名,女性156名,不明3名)、C大学が113名(男性42名,女性70名,不明1名)、D大学が170名(男性0名,女性170名)であった。

調査時期 A・B大学:2005年7月, C大学:2004年7月, D大学:2004年6月。

調査方法 個別記入形式の質問紙調査。講義時間の一部を用いた集団調査形式で実施された。

調査内容

1. うわさとの接触経験

最近3か月以内に、うわさ10項目を会話した経験

の有無を多重回答形式で尋ねた。使用したうわさの項目は、竹中(2004)が使用した項目を、各大学での予備調査を踏まえて修正し、「身近な友人・知人に関するうわさ(以下、「友人知人」と省略)」「有名人に関するうわさ(以下、「有名人」と省略)」「大学の教職員に関するうわさ(以下、「教職員」と省略)」「本学学生一般に関するうわさ(以下、「学生一般」と省略)」「大学全体や学内の特定の場所・物に関するうわさ(以下、「大学自体」と省略)」「大学の授業や学業に関するうわさ(以下、「授業」と省略)」「日常生活に関するうわさ(以下、「日常生活」と省略)」「事件・事故・危険な場所に関するうわさ(以下、「事件事故」と省略)」「幽霊・怪談に関するうわさ(以下、「怪談幽霊」と省略)」「その他」の10項目であった。その後、最も印象に残ったうわさ1つについて自由記述を求めた。

2. うわさに関する内容属性の評価

1. において、最も印象に残ったと回答したうわさについて、「面白さ」「確実性」「不安喚起」の内容属性3尺度の評価を、「全くそうではない」「あまりそうではない」「どちらとも言えない」「ややそうである」「非常にそうである」の5件法で尋ねた。「面白さ」尺度および「確実性」尺度は、竹中(2003)で使用した4項目と本研究で新たに作成した1項目とを合わせて合計5項目ずつであった。「不安喚起」尺度は、竹中(2003)と同様の5項目を使用した。項目内容を、Table 2に示す。

3. 日常的話題との接触経験

最近3か月以内に、日常的話題16項目(竹中,2004)を会話した経験の有無を、1.と同様の形式で尋ねた。選択肢は「恋愛」「サークル」などであった。

4. 日常的話題に関する内容属性の評価

3. において、最も印象に残ったと回答した日常的話題1つについて、2. と同一の項目を用いて5件法で回答を求めた。

結果

収集されたうわさ 「友人知人」の項目では、「Aさんに新しい恋人ができたらしい」「サークル内のちょっと態度の悪い子について」など、恋愛関係に関するうわさや、サークル内、アルバイト先、同じ学科などの人間関係に関するうわさが多かった。「教職員」の項目では、「A先生は○歳らしい」「A先生はカラオケが好きらしい」など、大学教員に関するうわさが多かった。「学生一般」の項目では、「学生の中で自殺する人がいる」「A大学の学生の同棲率は全国で2位」などのうわさが多かった。「授

Table 1 各大学におけるうわさの件数と自由記述の内容

大学	カテゴリー	件数	
A 大学 計34件 N = 7	大学自体もしくは は大学周辺の場 所のうわさ	11	<ul style="list-style-type: none"> ・地下通路があるらしい ・〇〇池に人面魚がいるらしい ・A 大学には A 棟, B 棟・・・とあるのに, I 棟だけがない
	教職員 のうわさ	9	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇学部で年功序列に反して抜擢された先生がいて, それを恨んだ先生が学 長を刺す事件が発生し, その後年功序列になっらしい ・レポートを扇風機で飛ばして近い順に成績を決めている先生がいるらしい ・答案にキティちゃんを書く「優」がつくらしい
	自殺 のうわさ	8	<ul style="list-style-type: none"> ・寮で自殺した部屋は封印される ・〇〇学部の院生に飛び降りが多く, 毎年何人が飛び降りているらしい ・A 大学の自殺率は全国 2 位らしい
	怪談幽霊 のうわさ	6	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇神社で人魂が出るらしい ・近くに古墳があるのだが, その古墳の頂上に穴が開いていて, その上に立つ と竜の鳴き声が聞こえるらしい ・〇〇学部の棟で, 夜中に首吊り自殺をしている人の影が見えるらしい
	B 大学 計327件 N = 208	身近な友人 ・知人のうわさ	165
大学生活 のうわさ		71	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の近くに新しく出来たカフェは, 味は普通なのに値段がめちゃくちゃ高 いらしい ・友人が, 悪質な金融業者から金をかりて, 取り立てに来られて, 窓ガラスを 全部割られたらしい ・図書館に超貴重な資料があるらしい。しかもコピーできたりするらしい
教職員 のうわさ		63	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇先生は元教え子と結婚しているらしい ・〇〇先生はカツラである ・〇〇先生のテストは難しいらしい
有名人 のうわさ		28	<ul style="list-style-type: none"> ・24時間 TV の今年のパーソナリティは〇〇らしい ・〇〇が飛び降り自殺したらしい ・〇〇は整形美人らしい
C 大学 計38件 N = 9		大学生活 のうわさ	17
	事件や事故, 危険な場所に 関するうわさ	10	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇ビルで自殺があったらしい ・部屋で窓を開けて寝ていたら首を絞められた人がいるらしい ・アパートで車のタイヤをパンクさせられる事件が頻発した。どうやら住人が 無断駐車などに腹を立ててやったらしい
	教職員 のうわさ	7	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇先生は, 前から 5 列目までに座らないと出席表を回してくれないらしい ・〇〇先生はミッフィーが好きで, ノートにミッフィーの絵を書く成績評価 がいいらしい ・今年はテスト内容のかわり年だから気をつけた方がいいらしい
	有名人 のうわさ	4	<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇と, ドラマで共演した〇〇 (具体的な芸能人の名前) は付き合っている らしい ・〇〇がマンションから飛び降りたのは, 薬物をやっていたかららしい ・〇〇は助走をつけて走って, マンションから飛び降りたらしい
	D 大学 計135件 N = 30	身近な友人・ 知人のうわさ	56
大学生活 のうわさ		49	<ul style="list-style-type: none"> ・学校の近くに新しくできたお店について ・学内生は学内生同士でかたまっていて友達になりにくいらしい ・新商品の〇〇が美味いらしい
教職員 のうわさ		16	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の単位のとれやすさについて ・教務課の〇〇さんは時間を 1 秒でもすぎると受付窓口をしめるらしい ・〇〇研究室の助手さんが無愛想らしい
有名人 のうわさ		14	<ul style="list-style-type: none"> ・芸能人の誰かが死んだらしい ・〇〇アナは学生時代, 朝から〇〇 (D 大学の所在地) で男とビールを飲んで いたらしく, 評判が悪かったらしい ・〇〇が〇〇 (D 大学の所在地) に住んでいるらしい

Table 2 各内容属性に関する主成分負荷量と平均値

質問項目	負荷量	平均値
面白さ : $N=548$, 固有値=3.444, $\alpha=.88$		
そのうわさは、楽しい内容である	.882	2.69
そのうわさは、ワクワクする	.918	2.62
そのうわさは、面白い	.882	2.82
そのうわさは、好奇心をくすぐるような内容である	.863	2.98
そのうわさは、飽きない内容である	.549	2.90
確実性 : $N=547$, 固有値=2.805, $\alpha=.79$		
そのうわさは、あいまいな内容である (逆転項目)	.767	3.38
そのうわさは、本当のことだと思う	.761	4.00
そのうわさは、情報源が分からない (逆転項目)	.778	3.69
そのうわさは、本当かどうか確かめることができない (逆転項目)	.606	3.50
そのうわさは、はっきりしている	.816	3.46
不安喚起 : $N=545$, 固有値=3.648, $\alpha=.91$		
そのうわさを聞くと、なんとなく心配になる	.832	2.82
そのうわさを聞くと、同じようなことが自分にも起きるのはと心配になる	.731	2.29
そのうわさを聞くと、恐ろしくなってくる	.886	2.26
そのうわさを聞くと、なんとなく怖くなる	.900	2.24
そのうわさを聞くと、なんとなく不安になる	.909	2.52

注：日常的话题について尋ねる場合は、「うわさ」を「話」に変えて用いた。

業」の項目では、「A先生のテストは難しいらしい」「期末試験の内容や難易度について」など、単位の認定や期末試験に関するうわさが多かった。「日常生活」の項目では、「〇〇のお店はおいしいらしい」「就職活動で、みんなの内定先」など、近辺のお店に関する内容や、就職活動に関するうわさが多かった。「事件事故」の項目では、「大学内で殺人事件があったらしい」「長崎の小学生が同級生を刺殺した事件について」など、近郊で発生した事件や調査時点で多く報道されていた事件に関するうわさが多かった。「有名人」の項目では、「ジャニーズの人が〇〇と付き合っていたらしい」「松浦亜弥は、本当は23歳らしい」など、タレントや芸能人に関するうわさが多かった。「大学自体」の項目では、「A大学には地下があって、入ると退学になるらしい」「D大学のシスターにたのむと、結婚相手を紹介してくれるらしい」などのうわさが多かった。「怪談幽霊」の項目では、「学生寮におぼけが出る」「友人が小人を見たらしい」など、幽霊が出る場所や超常現象に関するうわさが多かった。

大学別の接触経験率 大学別にうわさとの接触経験率を算出した (Table 3)。分析の結果、「友人知人」「教職員」「授業」「日常生活」のうわさに関しては、A大学、C大学、D大学における接触経験率が、B大学における接触経験率に比べて多かった。また、

「学生一般」のうわさに関しては、A大学とD大学における接触経験率が、B大学とC大学における接触経験率に比べて多かった。「事件事故」のうわさに関しては、A大学とD大学における接触経験率が、B大学とC大学における接触経験率に比べてやや多かった。「有名人」のうわさに関しては、D大学における接触経験率が、他の3大学における接触経験率よりも多かった。「大学自体」「怪談幽霊」のうわさに関しては、A大学における接触経験率が、他の3大学における接触経験率よりも多かった。

また、大学別に日常的话题との接触経験率を算出した (Table 3)。分析の結果、「住んでいるところ」「サークル」「学校での様子」に関しては、A大学における接触経験率が高く、B大学における接触経験率が低かった。「スポーツ」に関しては、A大学における接触経験率が高く、D大学における接触経験率が低かった。「天気の話」に関しては、B大学における接触経験率が低かった。「話題のニュース」「恋愛」「自分のこと」に関しては、D大学における接触経験率が高く、B大学における接触経験率が低かった。「大学の授業」に関しては、A大学における接触経験率が高かった。「バイト」に関しては、C大学における接触経験率が低かった。「旅行」に関しては、C大学における接触経験率が高く、B大学における接触経験率が低かった。「よく行くお

Table 3 各大学におけるうわさと日常的な話題の接触経験率（単位は%）

	A 大学	B 大学	C 大学	D 大学	検定
N	115	190	113	169	$\chi^2(4)$
友人知人	87.0	76.8-	92.0+	88.8	16.67**
教職員	51.3	41.1-	60.2+	49.1	10.79**
学生一般	44.3+	27.4-	26.5-	43.8+	18.48**
授業	73.9	52.6-	77.9+	77.5+	34.87**
日常生活	76.5	58.9-	65.5	81.1+	24.34**
事件事故	41.7	33.7-	33.6	47.9+	9.59*
有名人	53.0-	58.9	60.2	72.8+	13.17**
大学自体	51.3+	13.2-	23.9	19.5	60.11**
怪談幽霊	25.2+	11.6	12.4	8.9-	17.19**
N	114	191	113	168	
住んでいるところ	84.2+	55.0-	60.2	57.1	29.78**
よく行くお店	43.9	41.4	52.2	53.0	6.51 ^{n.s.}
スポーツ	67.5+	44.5	51.3	42.9-	19.85**
サークル	82.5+	58.1-	61.1	64.3	20.10**
衣服	56.1	58.6	51.3	65.5	6.02 ^{n.s.}
友人	81.6	73.8	83.2	82.1	5.75 ^{n.s.}
天気の話	68.4	54.5-	69.0	64.9	9.44*
テレビ番組	61.4	60.2	71.7	66.1	4.72 ^{n.s.}
話題のニュース	56.1	49.2-	61.9	78.0+	32.74**
大学の授業	87.5+	74.9	83.2	76.2	8.90*
学校での様子	61.4+	41.9-	52.2	54.8	12.28**
バイト	72.8	66.5	54.9-	70.8	10.34*
旅行	37.7	34.6-	52.2+	40.5	9.61*
恋愛	74.6	64.4-	72.6	82.1+	14.46**
自分のこと	56.1	51.8-	58.4	70.8+	14.19**

注：**： $p < .01$ ，*： $p < .05$ ，+は正の方向に、-は負の方向に有意な残差（5%）を示す

店」「衣服」に関しては、大学間に差がみられず、全般的に中程度の接触経験率であった。「友人」「テレビ番組」に関して、大学間に差がみられず、全般的にやや高い接触経験率であった。

大学別にみた内容属性の評価 うわさに関する内容属性3尺度の得点について、「全くそうではない」を1点、「あまりそうではない」を2点、「どちらとも言えない」を3点、「ややそうである」を4点、「非常にそうである」を5点として得点化した後、それぞれ主成分分析を行い、すべての尺度について一次元構造を確認した（Table 2）。各尺度の α 係数は $\alpha = .79 \sim .91$ と高かった。各尺度について、項目の合計点を算出し尺度得点とした。日常的な話題に関して、同様に尺度構成を行った。

続いて、うわさの種類³⁾を独立変数、3内容属性の尺度得点をそれぞれ従属変数とした1要因被験者間計画の分散分析を行った（Table 4）。分析の結果、

3内容属性すべてについて要因の主効果が有意であったため、それぞれの内容属性ごとに多重比較を行った。多重比較の結果、「授業」「事件事故」のうわさに比べて、「友人知人」「有名人」「教職員」「日常生活」のうわさの方が、面白さの尺度得点が高かった。また、「友人知人」「有名人」「教職員」「日常生活」のうわさに比べて、「授業」「事件事故」のうわさの方が、不安喚起の尺度得点が高かった。「授業」のうわさに比べて、「友人知人」のうわさの方が、確実性の尺度得点が高かった。

内容属性の観点からみたうわさと日常的な話題 内容属性3尺度の尺度得点をサンプル、6種類のうわ

- 3) 最も印象に残ったうわさとして選択された件数が、「学生一般」は8件、「大学自体」は6件、「怪談幽霊」は9件と少なかったため、以降の分析では除いた。

Table 4 うわさの種類別にみた内容属性の平均値

	友人知人	有名人	教職員	授業	日常生活	事件事故	検定
面白さ	<i>N</i>	250	35	30	99	62	$F = 11.62$
	平均値	14.71	15.60	14.73	11.13	15.69	$df = 5, 502$
	標準偏差	5.76	5.83	5.81	4.26	5.19	$p < .01$
	多重比較(HSD法, $p < .05$)	授業 = 事件事故 < 友人知人 = 有名人 = 教職員 = 日常生活					
不安喚起	<i>N</i>	247	35	30	99	62	$F = 26.35$
	平均値	10.89	9.77	10.17	16.21	10.11	$df = 5, 499$
	標準偏差	5.19	5.55	5.13	5.92	5.74	$p < .01$
	多重比較(HSD法, $p < .05$)	友人知人 = 有名人 = 教職員 = 日常生活 < 授業 = 事件事故					
確実性	<i>N</i>	250	35	30	99	62	$F = 4.99$
	平均値	18.92	16.54	18.10	16.97	18.95	$df = 5, 502$
	標準偏差	4.31	5.18	5.59	4.09	3.96	$p < .01$
	多重比較(HSD法, $p < .05$)	有名人 = 授業 < 友人知人					

さと10種類の日常的な話題⁹⁾とをカテゴリーとし、回答者の尺度得点の平均値についてクロス表に基づく数量化Ⅲ類(双対尺度法)によって分析した。分析の結果、固有値は成分1が.037, 成分2が.002であった。第1成分を横軸, 第2成分を縦軸とした座標平面上にカテゴリースコアとサンプルスコアの平均値を布置した図がFig. 1である。各うわさの布置から, 6種類のうわさは, 「日常生活」「友人知人」「教職員」のまとまりと, 「有名人」のまとまりと, 「事件事故」「授業」のまとまりとに分類された。

また, 6種類のうわさをサンプル, 内容属性3尺度の尺度得点をカテゴリーとし, 回答者の尺度得点の平均値についてクラスタ分析(平方ユークリッド距離による最遠隣法)を行った。分析結果を, Fig. 2に示す。クラスタ数を3とすると, 6種類のうわさは, クロス表に基づく数量化Ⅲ類(双対尺度法)と同様に, ①で示した「日常生活」「教員学生」「友人知人」のクラスタと, ②で示した「有名人」のクラスタと, ③で示した「事件事故」「授業」のクラスタとに分類された。

考 察

本研究の目的は, 大学特性が異なる4大学でうわさを収集し, 「面白さ」「確実性」「不安喚起」の3つの内容属性を用いてうわさを類型化し, 竹中

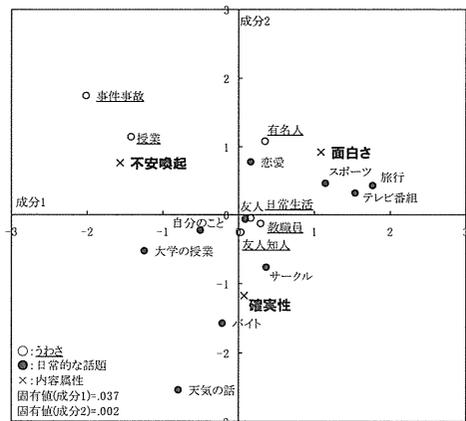


Fig. 1 内容属性の観点からみたうわさと日常的な話題の構造

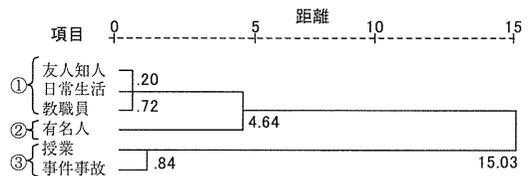


Fig. 2 うわさの種類に関するクラスタ分析結果

(2003)で抽出された「不安喚起型」と「面白さ型」との2類型や, 竹中(2004)で抽出された「日常話題型」の類型が再現されるか否かを検証することであった。

大学別にみたうわさとの接触経験

大学別にうわさとの接触経験率を比較したところ, A大学やD大学のようにうわさとの接触が多い

4) 最も印象に残った日常的な話題として選択された件数が, 「住んでいるところ」は12件, 「よく行くお店」は9件, 「話題のニュース」は16件, 「学校での様子」は14件, 「衣服」は14件と少なかったため, 以降の分析では除いた。

大学と、B大学のように接触が少ない大学がみられることが明らかにされた。また、個別のうわさに注目すると、「大学自体」「怪談幽霊」のように、A大学でのみ特徴的に多くみられるうわさと、「友人知人」「授業」のように、全ての大学で全体的に多くみられるうわさが見出された。したがって、大学によって、全体的なうわさとの接触経験率や、多く話されるうわさの種類が異なるといえる。

内容属性の観点からの類型化

クロス表に基づく数量化Ⅲ類（双対尺度法）における各うわさの布置と、クラスタ分析の結果から、本研究で扱った大学生の日常会話におけるうわさは、以下の3つのまとまりに分類されると考えられる。すなわち、「友人知人」「教職員」「日常生活」のまとまりと、「授業」「事件事故」のまとまりと、「有名人」のまとまりとの3つのまとまりである。続いて、分散分析の結果と、クロス表に基づく数量化Ⅲ類（双対尺度法）における各うわさと内容属性との布置から、相対的にみて、「友人知人」「教職員」「日常生活」のうわさは、面白さが高く、不安喚起が低く、確実性がやや高い内容であると考えられる。また、「授業」「事件事故」に関するうわさは、不安喚起が高く、面白さが低く、確実性がやや低い内容であり、「有名人」のうわさは、面白さが高く、不安喚起が低く、確実性がやや低い内容であると考えられる。

「友人知人」「教職員」「日常生活」に関するうわさには、「Aさんに新しい恋人ができたらしい」「A先生はカラオケが好きらしい」「就職活動で、みんなの内定先」などの内容が含まれていた。普段から接する友人や大学教員などの身近な人間関係や、普段の日常生活に関する内容のうわさであり、内容属性としては、面白さが高く、うわさの中では比較的あいまいさが低いことから、「日常型」の類型と命名する。

「授業」「事件事故」に関するうわさには、「A先生のテストは難しいらしい」「大学内で殺人事件があったらしい」などの内容が含まれていた。大学生にとって、期末試験の難易度や成績に関する内容や、事件・事故に関する内容は、あいまいさが高く、不安を喚起する内容であると考えられる。また、期末試験や事件・事故などは、日常的に接する事柄ではないことから、これらのうわさを「非日常不安型」の類型と命名する。

「有名人」に関するうわさには、「ジャニーズの人が〇〇と付き合っていたらしい」など、タレントや芸能人に関する内容が含まれていた。普段の日常生

活では接することのない有名人に関するあいまいで面白い内容のうわさであり、娯楽的に話されていると考えられることから「非日常娯楽型」の類型と命名する。

以上をまとめると、本研究では、4つの異なる大学特性をもつ大学においてうわさを収集し、「面白さ」「確実性」「不安喚起」の3つの内容属性の観点から、うわさの類型について検討した。その結果、大学生の日常会話におけるうわさは、「日常型」と「非日常不安型」と「非日常娯楽型」との3類型に分類されることが明らかにされた。

3類型と先行研究における類型との対応

「日常型」の類型は、面白さが高く、確実性がやや高く、身近な人間関係に関するうわさが多かった。竹中（2004）においては、「日常話題型」の類型が、面白さと確実性が高く、「日常生活」「教員学生」「ゴシップ」のうわさが含まれていた。したがって、本研究における「日常型」は、内容属性や含まれるうわさの内容の類似性から、竹中（2004）における「日常話題型」に対応する類型であると考えられる。

「非日常不安型」は不安喚起が高く、確実性がやや低く、事件や事故に関するうわさが含まれていた。竹中（2003, 2004）においては、「不安喚起型」の類型が、不安喚起が高く、ある程度の確実性を持ち、「事件事故」や「自殺」などのうわさが含まれていた。したがって、本研究における「非日常不安型」は、内容属性や含まれるうわさの内容の類似性から、竹中（2003, 2004）における「不安喚起型」に対応する類型であると考えられる。

「非日常娯楽型」は、面白さが高く、確実性が低く、有名人に関するうわさが含まれていた。竹中（2003, 2004）においては、「面白さ型」の類型が、面白さが高く、確実性が低く、「怪談幽霊」や「大学自体」のうわさが含まれていた。本研究における「非日常娯楽型」は、含まれるうわさの内容は異なるものの、内容属性の類似性から、竹中（2003, 2004）における「面白さ型」に対応する類型であると考えられる。

本研究では、竹中（2003, 2004）とは異なる大学においてうわさを収集し、内容属性の評価の観点から収集されたうわさを検討した結果、竹中（2003, 2004）における類型を再現する「日常型」「非日常不安型」「非日常娯楽型」の3類型が抽出された。したがって、大学生の日常会話におけるうわさを分類するための枠組みとして、本研究における3類型は一定の一般性を持ち得ると考えられる。

今後の課題

本研究では、4つの異なる大学においてうわさを収集したものの、各大学の集団特性と、うわさの発生などとの関連について十分な検討がなされていない。そこで今後は、大学特性とうわさの発生との関連について検討する必要があると考えられる。

引用文献

- Allport, G.W. & Postman, L. (1947). *The psychology of rumor*. New York: Henry Holt. (南博訳 (1952). *デマの心理学* 岩波書店)
- 廣井 脩 (1988). うわさと誤報の社会心理 日本放送出版協会
- 稲越孝雄 (1990). 話題の構造 (9) 日本社会心理学会第31回発表論文集, 160-161.
- 稲越孝雄 (1992). 話題の構造 (10) 日本社会心理学会第32回発表論文集, 90-91.
- 川上善郎 (1997). うわさが走る - 情報伝播の社会心理 - サイエンス社
- 木下富雄 (1977). 流言 池内 一 (編) 講座社会心理学 東京大学出版会, 11-86.
- Knapp, R.H. (1944). A psychology of rumor. *Public Opinion Quarterly*, 8, 22-37.
- 松井 豊 (1997). 「情報に関するアンケート」調査報告 (2) メディアのイメージと効用 広告月報, 451, 38-43.
- 水野博介 (1998). メディア・コミュニケーションの理論 - 構造と機能 - 学文社
- 野村理恵・木下富雄 (2006a). 噂の伝達における動機づけ (1) - 噂のタイプとの関係において - 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 170-171.
- 野村理恵・木下富雄 (2006b). 噂の伝達における動機づけ (2) - 噂のタイプとの関係において - 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 172-173.
- 坂田 稔 (1976). 日本近代史に見るくちコミの諸類型 南博・社会心理研究所 (著) くちコミコミュニケーション 誠信書房, 28-75.
- 多川則子・小川一美・斎藤和志 (2006). 日常的コミュニケーションにおける話題の収集を目指して - テーマの重要性判断に基づく検討 - 対人社会心理学研究, 6, 71-79.
- 竹中一平 (2003). 日常会話におけるうわさと話題の構造 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 212-213.
- 竹中一平 (2004). 日常会話におけるうわさと話題の構造 (2) 日本社会心理学会第45回大会発表論文集, 250-251.
- 竹中一平 (2005a). 大学新入生が話題にするうわさの時期的再帰性 - 大学新入生への3年間の反復調査による検討 - 日本心理学会第69回大会発表論文集, 72.
- 竹中一平 (2005b). 対人コミュニケーションの観点からみたうわさの伝達 社会心理学研究, 21 (2), 102-115.
- 竹中一平・松井 豊 (2005). 日常会話におけるうわさと話題の比較 - 属性と機能の観点からの検討 - 筑波大学心理学研究, 30, 33-42.

(受稿3月23日：受理4月27日)